

人間学研究所・臨床心理学部共催

RelaX'mas をあなたに

— ゆっくり まったり ホッとコンサート♪ — 開催報告

松井愛奈・堀内詩子

開催主旨

人間学研究所では地域に開かれた公開講演会やシンポジウム等を実施してきたが、コンサートや歌唱を取り入れた新しい形のイベントを模索していた。

また、臨床心理学部には、2013年度より「教育福祉心理学科」が開設され、「子ども教育心理専攻」「保育福祉心理専攻」の2コースのもとに、臨床心理学を学んだ上で、子どもや保護者に寄り添いつつ、子育て支援、障がい者支援、教育支援に携わる人材育成を目指している。

そこでこのたび、両部門の協働により、地域の子育て家庭を対象とし、イベント中に保育を行うことで、保護者が子どもから離れ、音楽を

通してくつろげる場を提供することを企画した。イベントには、臨床心理学科・保育福祉支援コースに在籍する1回生の学生も関わり、学びの場としての機能を果たすことも目的とした。

なお、本イベントのタイトル「RelaX'mas をあなたに— ゆっくり まったり ホッとコンサート♪ —」は開催の主旨をもとに、Relax と Xmas を組み合わせた造

語を用いつつ、学生が考案したものである。

開催概要

日時：2012年12月8日（土）10時～12時
（保育受付9時30分～）

場所：指月ホール・第一会議室（コンサート）
介護演習室・体育館（保育）

参加者数：23名（コンサート）、19名（保育）

コンサート

京都文教大学・短期大学アカペラサークル LA*LA*LA による「気まぐれロマンティック（いきものがかり）」で幕を開け、鏑幹一郎学長の開会のあいさつ、吉村夕里教授の教育福祉心理学科設立の趣旨の説明の後、第1部「きく」では持木悠氏（テノール歌手）、柴田奈穂氏（ヴァイオリニスト）、石川まぎ氏（ピアニスト）により下記の曲目が演奏された。

1. いつかのメリークリスマス（B'z）
2. 粉雪（レミオロメン）
3. リベルタンゴ（A. Piazzolla 作）
4. アベマリア（A. Piazzolla 作）
5. グラナダ（Lara 作）
6. Be my love（S.Cahn & N.Brodsky 作）
7. ディズニーメドレー
8. スペイン（Chick Corea 作）



9. シーラカンスと夜(柴田奈穂 & 石川まぎ作)
10. o sole mio (ナポリ民謡)
11. クリスマスイブ (山下達郎・J.Pachelbel)



(左から) 石川まぎ氏、持木悠氏、柴田奈穂氏



コンサート会場風景



アカベラサークル La*La*La による熱唱

第2部「はなす」では、京都における障害者福祉施設や飲食店の経営などを高いデザイン性で展開している!-style (エクスクラメーション・

スタイル) による軽食を提供し、参加者が自由に歓談し交流できる場を設けた。

第3部「うたう」では、堀内詩子の伴奏、学生アカベラサークル LA*LA*LA の協力のもと、持木悠氏の歌唱指導を受けて「Winding Road (絢香・コブクロ)」を参加者全員で歌った。最後は、依田博人間学研究所所長の閉会の挨拶によりコンサートが締めくくられた。



参加者全員で歌った Winding Road

保育における学生の学び

保育は、NPO 法人「働きたいおんたちのネットワーク」キッズサポート部門に委託し、臨床心理学科・保育福祉支援コースの学生も「臨床心理学基礎演習」の一環で参加した。

事前準備

「臨床心理学基礎演習」の授業ではこれまで乳幼児やその保護者と関わる取り組みを行ってきた。本企画の趣旨である「子どもと離れて母親(父親)が過ごす時間」は子どもにとっては、母親(父親)と離れて初めての場所で過ごす時間でもある。本企画に携わるにあたって、学生たちは事前学習として「母子分離」について学び、親子が分離する際の心理的な側面に焦点をあてて学習を進めた。乳幼児が父母と離れて過

ごす意味を「どのように関わるのが乳幼児と保護者の安心感につながるか」「どのような環境で乳幼児を迎えるのがよいか」というキーワードで考え、班ごとに乳幼児を迎える準備を行った。ぬいぐるみを準備したり、部屋を飾る装飾物を作ったりするなどの班があった。

当日

多くの学生がどのように幼児と関わったらよいか戸惑っていたが、時間の経過とともに子どもたちにも慣れ、円滑なコミュニケーションを持つことが出来ていた。しかし幼児が母親を想い、泣いてしまう場面では、どう対応したらよいか分からずにうろたえてしまい、保育士からの助言を受ける場面もあった。

学生たちは保育室や体育館で子どもと一緒に過ごし、どんな事に興味を持つのか探りながら、それぞれの子どもの様子に合わせて子どもとの距離を縮めていった。具体的には、走り回る子どもにとことん付き合ったり、おもちゃを通してコミュニケーションを図ったり、電車やぬいぐるみでのごっこ遊びやボールを使った遊びなどを行ったりして、様々に関係を深めているようだった。また、保育室で子どもがどのように過ごしているかを詳細に用紙に記入する学生の姿も見られた。

学生は、保育の終了時に保護者の迎えにも対応し、子どもが保育室でどんな様子で過ごしていたのか、どんな遊びやおもちゃに興味を示していたのかなどについて情報を共有する場面があり、保護者との交流が見受けられた。

振り返り

母親と離れて過ごす幼児と関わることは学生たちにとっても大きな経験となった。学生の感想の中には、「子どもを預かることへの責任を感じた」ことや、母親が子どもにとっていかに

安心を感じられる対象なのかという気づきがあった。また、「保育士がフォローしてくれた」など現場の保育士との関わりもまた学生にとってもよい刺激となったようだ。このような経験を重ねることでもっと子どもと関わりたいと感じ、次年度から始まる専門科目群の履修に向けて動機を強める結果となったことを報告する。

アンケートより

コンサート終了時に行った参加者へのアンケートより、「プロの方の生演奏を近くで聴くことができてよかった」「子どもと離れてのイベントはなかなかないので、とてもリフレッシュできた」「楽しく歌えた」「今回のようなイベントにまた参加したい」など、保育つきのイベントであったことや、プログラム内容に対する満足度が高かったことが伺えた。

一方で、第2部「はなす」の時間が短くなってしまったことや、第3部「うたう」の時間がもう少し長い方がよかったなど時間配分に対する要望や、会場が寒かった、受付まで分かりにくかった、学生のあいさつができていないという声もあり、今後の課題として残される。